

# 講中お知らせ

平成 31年(2019) 2 月 号

法華講宝相寺支部「講中お知らせ」編集室 0739-22-2232  
発行人 桐本昌吾 / デザイン 玉置貴

## ●日如上人御指南

①この御文を拝する時、折伏を忘れた信心は、大聖人の御意(ぎょい)にかなう正しい信心ではないことを、私達はよく知らなければなりません。  
▼私どもは大聖人の御意にかなう正しい信心を行じてこそ、広大無辺なる功德を享受(きょうじゅ)し、一生成仏を果たすことができるのであります。大日蓮平成30年6月号

②「いふといはざるとの重罪免れ難し。云ひて罪のまぬかるべきを、見ながら聞きながら置いてしましめざる事、眼耳の二徳忽ちに破れて大無慈悲なり。章安の云はく『慈無くして詐り親しむは即ち是彼が怨なり』等云云」阿仏房尼御前御返事御書906  
▼「いふと いはざるとの 重罪免れ難し」と仰せであります。この御文意は、前段において、謗法に対しては厳しく破折すべきであるが、時にその浅深によって厳しく責めないこともある。▼しかし、相手の謗法を知って、これを明らかに破折すれば世間の憎しみを受け、さりとて、これを黙して破折しなければ与同罪を受けなければならぬ。▼いずれにしろ、その重罪は逃れ難い。しかも謗法の者を見て、これを破折すれば与同罪を逃れることができるのに、謗法を目の当たりにして、また耳にしながら誠めないのは「眼耳の二徳忽ちに破れて大無慈悲」の者となるの御指南であります。▼されば、章安大師は「慈無くして詐り親しむは 即ち是彼が怨なり」と仰せられ、詐り親しむのではなくして、一人でも多くの人に慈悲の心をもって下種折伏していくことが、いかに大事であることを教えられているのであります。▼自行化他の信心／一生成仏の信心／広宣流布の信心 大白法平成30年4月1日号

●文永元年(一二六四)十二月十三日四十三歳。鎌倉より富士上野の地頭・南条兵衛七郎殿、南条時光殿の父に。文永二年(一二六五)三月八日逝去、法号を行増。時光七歳。別名「慰勞書」御真筆分持現存、日興上人写本有。  
●兵衛七郎殿の病気を慰勞。教・機・時・国・教法流布の先後の五義判(宗教の五綱)、法華最勝を御教示。  
▼釈尊一代五十年の教説を、先判・後判の権実に分け、三徳有縁の仏である釈尊の仰せに背く者は不孝第一の者と、実経たる『法華経』を捨てることの罪を御教示。  
▼末代の三毒強盛の鈍根の衆生は、実大乘たる『法華経』(三大秘法)によってのみ成仏できる機根であり、念仏は時に合わない教えであると破折。日本国は『法華経』有縁の国である、仏法流布の次第を述べ、念仏を破折。悪知識に負けないよう、訓誡。  
▼「文永元年甲子(きのえね)十一月十一日 頭に傷をかほり 左の手をうちをらる」の小松原の法難を述べられ、大聖人は日本第一の「法華経の行者」であることを示され、後生の安心と、病氣本復の激励をされ、再会して直々に御法門を申し上げたいと述べられた。

●今月の御書  
南条兵衛七郎殿御書  
三千の観道を得たりとも、法華経を千万部書写し、一念の奉公あれば朝(ちよう)につか(仕)ふる人の十年二十年(知)りながら奏(そ)せ(奉)公(公)皆(皆)う(失)せ(還)る(かえ)る(者)と(知)る(し)め(す)べ(し) 322 頁

**仏教** ◆四人の妻▼第一の妻「一緒には逝けない」▼二番目の妻「望んで妻になったわけではありません」▼三番「最後の日までお見送ります」▼四番「ずっと一緒にいましたから離れることはしません」▼一番は身の財、二番は蔵の財、三番は家族や友人▼4番が自分の心≠魂。三世に渡って己についてくる無上の宝。#「心の財」#観心本尊抄「釈尊の因因果徳の二法は」

**宗教** ◆人間は優しさや温かさを備えていれば、それだけで幸せで、満ち足りている▼そこに、智慧が備われば友人たちも他人にも、友好的で平和な雰囲気味わえる▼これは国籍・文化・思想に関係の無い人間観だ。

**カルト** ◆財務は大善と寄付をして功德をもらう。ツボを買って幸せになる。後者は、まだツボは残る(-;)▼食法餓鬼、守銭奴はカルトです。▼「食法がきと申すは、出家となりて仏法を弘むる人、我が法を説けば人尊敬するなど思ひて、名聞名利の心を以て人にすぐれんと思ひて今生をわたり、衆生をたすけず、父母をすくふべき心もなき人を、食法がきとて法をくらふがく(餓鬼)と申すなり」「四条金吾殿御返事」/砂餅供養/職員給与

**指導部** ◆「祈りが足りない」などと切り捨てる。これでは信心の血脈を断ってしまう▼それは魔に敗れた姿です。浅い理解から全てを押し量ろうとした増上慢の姿です▼信仰者は互いに仏子であることを信じられる「仏の心」を持つのです。▼「水魚の思い」がそうなのです。水と魚は違うのですが、この異体を「つなぐ」のが、「仏性」=「仏の命」なのです。

**総代** ◆「我等法華経の行者の煩惱即菩提生死即涅槃を頭はしたり云云」御義口伝▼生死も煩惱も悩みです。悩みが即涅槃であり菩提である?理解不能です。▼生死の苦しみとは、赤ちゃん「オギャー」と泣いて生まれ、成人しては競争社会、病氣も死も苦。▼でも、仏法では煩惱は菩提の母なのです。煩惱があるから修行して仏になり、菩提を得られる。煩惱が無ければ仏道修行も動機が無いのだからしない。だから一生、仏には成れない。▼信仰とは「煩惱」をよい方向に取り扱っていく事なのです。

■前回の『講中おしらせ』に「○勇躍→×躍躍」と一部校正ミスをいたしました。御指摘下された読者様及び皆様にお詫び申し上げます、紙面の向上により精進いたします。今後とも御愛読のほど宜しくお願い申し上げます。※記事・画像関係の copy・download・転載・引用を含む一切の無断使用を禁じます。「魚拓」も禁じます。「講中おしらせ編集室」

**哲学** ◆仏教だから、色相莊嚴の「仏」は無い▼人間が近づけばより遠くなり、遙かに遠ざかる、虚空(こくう)にある虚仏(こぶつ)が「空(クウ)仏」です▼言えば「理論仏」「迹門」の方便です。▼大聖人の仏法は「本門」です。大御本尊の信仰者は皆「十界本有」の“生身の人間”です。■「文底秘沈抄」「色相莊嚴(しきそう-そうごん)の仏は是れ世情に随順する虚仏なり」\*夢中の虚仏。法華経に誘引するための方便権教の仏。

**生活** ◆「あんなヤツ死ね」わたしの中の鬼が叫ぶ。地獄・餓鬼・畜生が吠えたてる。▼「他人を恨んでも、他人のせいにしても傷つくのは自分ダヨ」と御仏はさすとす。▼十界互具とは人間の命の事。そして何を出すかは自分の決め事。これが大聖人の仏法だ。

**護る会** ◆信仰者は自分の命の根源を護りましょう。▼大御本尊=大聖人の 妙法とは、人間を自立させ自覚させる根本の法源なのです。▼自分の命が大聖人の大法、本源(宇宙の根源の法)に根ざすのですから、信仰者はどこまでも安定し、どこまでも安堵するのが、南無という事なのです。

**講頭** ◆勇躍前進の年▼今年一番の南近畿地方部の活動である「500人地方部大総会」も無事に終了しました。▼講中皆様のご協力のお蔭で、宝相寺支部は目標を上回る参加をすることができました。▼年の初めにいいスタートが切れたと思います。▼今年も、この調子で必ず個人々の誓願である1年に一人以上の折伏成就をめざして精進してまいります。

**住職** ◆「十界本有(じっかい-ほんぬ)▼経王である法華経は衆生に「仏性」があり「万人成仏」と説く。同時に、どんな衆生にも「地獄、餓鬼、畜生、修羅」があることにもなる。貪り、愚痴り、争いも地獄もある。動物と同じ側面を持つ。▼「本有」だから「貪り、癡か、瞋り」の無い衆生はいない。▼ですから、この“煩惱”さえも蘇生させて、意味のある人生のエネルギーとすることが「煩惱即菩提」(ぼんのうそく-ぼだい)の法門なのです。

